

## 京都美術工芸大学で学ぶ2人が語る “京都のちょいふるマンション”



### 建築学科 4回生 亀本夏稀さん

築40年以上のマンションについて、管理の良し悪しが中古価格にどのような影響を与えているのか研究しています。これまで新築にこだわっていましたが、築古でも管理が良好な建物には価値があることを知りました。これから就職する不動産業界での仕事においてもここで学んだ知識を活かしていきたいと考えています。

マンションは新築や築浅が良いと思っていました。ゼミの一環でマンション関係団体の事業に携わり、管理状態と流通の分析作業をするなかで、築年数が経ったマンションにも建物が良好に維持されているものがあることを知りました。きちんと管理がされているマンションは子育て世帯でも安心できるし、コスト的にも選びやすいと思います。

デザインは、特に子育て世帯の目線を意識。“これは何だろう”と目に留めてもらえるような雰囲気になるよう、藤原さんとアイデアを練りました。

歴史都市・京都といえば、寺社仏閣という印象が強く、このマンションの研究をするまでは、京都のまちなかにこれだけ多くのマンションが建っていることを知りませんでした。これからの京都には、町家とマンションがどう共存していくかも重要であると気づきました。

私なりの“ちょいふる”選びは、エントランス周りがきれいに整頓され、まちに馴染んで落ち着いていること。素敵な“ちょいふる”と出会えるといいですね。



### 芸術学科 3回生 藤原真奈さん

視覚的に情報を伝達するためのビジュアルデザインを専攻しています。大学の課題やコンペでは、ポスターやパッケージデザインなどを制作しています。新しい価値観やメッセージを相手に伝える方法を考えることはとても楽しくて、デザインを通して社会にどんな価値を生み出せるのかを常に考えていきたいと思っています。

マンションと言えば洗練された都会的、地域から独立した住まいのイメージがありました。“京都のちょいふるマンション”を企画するなかで、築40年以上のマンションが増えており、中には団地型マンションや地域にも開かれたコミュニティのあるマンションがあることも知りました。

また築40年以上のマンションがすべて老朽化しているわけではなく、管理の行き届いたマンションは建物がきれいに維持されていること、築古のマンションならではのコミュニティがあることも同時に知りました。

デザインは、京都に関連するアイコンを配置し、実際に京都に住む私の「街中にふっと感じる京都」を取り入れました。また、大人目線だけでなく、家族の距離感や子どもたちの生活感も感じられるよう、3つのストーリーに仕立てました。

ちょっと古いマンションは低層マンションも多く、日当たりの良い窓から美しい自然や風景が見えて、新築の高層マンションとは一味違った良さもあります。

私なりの“ちょいふる”選びは、安心できる近所付き合い。住む人や管理人さんとのコミュニケーションは大事。ちょっとの目利きで安心な住まいを見つけてください。